

一度離れ離れになった者同士が再び出会い、友達になる。なんてことはありふれた話だ。だがあえて、今回は俺がかつて別のところへ行ってしまった友と再開した時の話をしよう。

高校生になりある程度日がたった下校中、珍しく部活が休みだったので寄り道でもして帰ろうと考えていた。中学の時と違い、自転車をこぐ距離が長くなったのでより早く、より近い道を探していた俺は、新しい道を開拓すべくふだん通るところとはまた別の場所を見つけた。よし、さつそくとその道を通ること数分、割と大きな河川敷へと出た俺は生涯で初めて見たであろう景色に遭遇した。今まで目にしなかった光景に思わずじっと見ていると、背中から何かが当たる音がしたので、後ろを向くとそこには俺と同じ制服を着た男が立っていた。俺より背が高く、俺の頭がようやく相手の肩に届くぐらいだ。どうやら道を塞いでしまっていたようで、急いで道を開けてやってその男を通そうとしたが、しかし、運悪く足を引っかけ転ばしてしまった。恐る恐る声をかけると、その男はかつこつけた顔で「大丈夫だ、問題ない」などと返事を返してきたのだ。その直後、自分のやっていることに気がついたのか、そそくさと立ち去ってしまった。いきなりのことだったので俺は何も出来ずにいたが、会って数分もなかったあの男に対して、ある印象を持っていた。あいつ、どこかで見たことがあるな：

あれからは何もなく家へ帰り、そのまま次の日になった。いつもの通り学校へ行き、何事もなく授業をこなし部活へと行こうとした俺に話かけてきたのは昨日出会ったあの男であった。昨日の事に対して何か文句でもつけにきたのではないか、とか邪推していると、

「この学校に将棋部ってあるよね、よかったら案内して欲しいんだ」

と友好的な態度で接してきた。一応初対面でこの対応とは、まあ、気にしないならいいか。都合のいいことに俺は将棋部に入っている。新入部員が一人増えるというなら喜んで案内しよう。

「俺も行くところだったからついてこいよ」と促すと

「そうだったのか、ありがとう。実は最近転校してきたばかりでね。細かい場所までは分からなかったんだ」

「転校生だったのか、通りで校内では一度も見かけないわけだな」

「実際にこの生徒として学校に来るのは初めてなんだよ。でも、こうやって知っている顔の人がいて助かったって思っているんだ」

……？ 知っているほどのやり取りをした覚えはないのだが、どうなっているんだ？ 昨日のやりとりを思い出してみたが、そこまでのものではなかったぞ、考え込んでいると目的の場所、将棋部の活動場所となる教室が見えた。あの場所から大して時間はかからなかったな。

「ここが今日の活動場所だ。大体ここで活動しているけど、たまに場所が変わることもある」

「何か理由でもあるのかい？」

「俺たちの部活はあいている教室を使うことになっていいるからな。他の部活の連中が使いたいと言えば大人しく明け渡ししかないのさ」

「つまり、場合に依じて場所を転々とするのを強いられているんだね？」

「……そこまできつく言われてはいないけどな」

教室の前でちよつとした話をしていると、突然目の前の扉がザッと開けられた。

「お前たちは扉の前でいったい何を話しているんだ？ さっさと入って来いよ」

「ああ、先輩。こんにちは」

「はい、こんにちは。君が後輩の中では一番乗りだよ。部長たち、今日は来ないから今は僕を含め二人しかいないんだ。そしてこっちは……君の友達かな？」

「はい、そうです。これからそちらに入部する坂口です。よろしくお願いします」

いやいや、今日初めて会話を交わしました仲ですよ。向こうはなんだかその気だけだ。

「おお、そうなのかい、こちらこそよろしく。こんなところで話すのもなんだし、中に入っておいでよ」

教室の中に入って、入部の手続きが済んだ後、俺はさっそく坂口、あの男に一局の勝負を申し込んだ。

「いいよ、実はチェスはやったことがあるけど、将棋を指すのは初めてなんだ。」

「そうだったのか、じゃあ駒の動かし方から教えないとな」

「でも、この桂馬というのはなんとなく分かりそうだ、こう動かすんだったかな？」

とあらかじめ用意された盤上の柱馬の駒を掴むと、あろうことか左側に駒を置いたのだ。

「この動きは……、つてこれはチェスで言うナイトの動きじゃないか！」

桂馬は横には動けません。しかし、我ながらわざとらしい言い方だとは思ったが、相手もわざとらしかったのでおあいこだろう。

なんだかチェスと混同しているので、動かし方を改めて教えることにした。

そこから要所で突然ボケを繰り出す坂口に突っ込みを入れながら、なんとか全ての駒の説明を終えたのだった。

「……大体分かったよ。これで大丈夫そうだ」

「まだ怪しいところはあるけどな」

「なら、これから試してみるかい？」

いいだろう、と言いたいところだが、残念ながらもう時間がない。そう言おうとした瞬間、先輩が立ち上がり、こう言った。

「いや、部活が終わる時間だ。今日のところはこれでお開きだね」

時間が来たので俺たちは下校することにした。後片付けを終え、下駄箱まで行き靴を履き替えた際に外を見ると、突如夕立が降ってきたのだ。

「じゃ、僕は先に帰るね」と先輩たちはすばやく傘をさし、文字通り先に帰ってしまった。突然降ってこられたんじゃあ仕方ない。俺もさっさと帰ることにしよう。持っていた傘を開こうとしたが、坂口のほうを見ると、あいつは少し困ったような顔をしていた。

「傘を忘れたのなら、貸してやろうか？」と言いながら、カバンの中にあつた折り畳み式の傘を貸してやった。すると、不意にある事を思い出した。確か、こんな風に傘を貸してやったことがあつたな。そして、こいつの顔はやはり見覚えがある。

「懐かしいものだね、あのときのことがつい昨日のことに思えるよ」

「じゃあ、やはり……」

俺の記憶は正しかったようだ。

「君は昔、つていつてもつい数年前のことだけだね。その時もこうやって傘に入れてくれたじゃないか」

そうか、完全に思い出した。わずかな間だったからすぐに忘れてしまっていたが、一度だけそんなことがあつたな。それにあのときのあいつは俺よりも小さかつたじゃないか。会わなかつた間にこんなにも大きくなつていたのか。

「今回はあの時と同じ傘を貸すわけにはいかないけどな」

「思い出してくれたのならそれでいいさ。」

それにしても、雨が降って思い出すとは思わなかつたな。

「今さら言うのもなんだけど、今後ともよろしく。でいいのかな？」

嬉しそうな顔でこんなことを言われたら、こう言い返すしかないな。少し笑いながらこう言った。

「いいですとも」

終わり